連載小説
まちおこし特命社員 石打悠太

「馬鹿者」を命ず!

第三十回 伊予南フェア始まる その一

渋谷和宏
イラスト●丹下京子

登場人物

石打悠太（いしうち・ゆうた） 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

榎太一（えのき・たいち） 76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。大渡晴美は娘、薫子は孫。

ショーン・次川（つぎかわ） 45歳、アメリカの投資ファンド、ヴィンセント・ファンド副社長。

二瓶五郎（にへい・ごろう） 36歳、深山の里の昼食処の霞庵の料理長兼主人。

亀田太（かめだ・ふとし） 29歳、伊予南市役所・地域振興課員を解雇され、新庄の部下として伊予南プロジェクトの社員となるが……。

大渡薫子（おおわたり・かおるこ） 21歳、伊予南市長である大渡晴美の娘、京大阪大学で建築を学ぶ。

喜多嶋翔（きたじま・しょう） 25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

前回までのあらすじ

新庄の命令で亀田が西朱雀プロジェクトにやってきた。一方、高齢者を雇ってほしいという悠太の提案を聞いた二名島バッテリーの榎社長は、「霞庵」の昼食に悠太を誘う。そこには榎に呼び出されたショーン・次川がいた。

「ま ちおこし特命社員だって？」

昼食処の霞庵の土間で電子タバコを吸っていたショーン・次川が立ち上がり、刺すような目で悠太をにらみつけた。

悠太は次川から目を逸らし「僕に会わせたいと言っていたのはこちらの方ですか？」と榎に聞いた。

「その通りだ。三人でゆっくり話でもしようと思ってね」

「なぜですか⁉」

「どうして⁉」

悠太と次川が同時に声を発した。

「まあ、そう焦るなって。部屋に行こうじゃないか。二瓶くん、頼むよ」

次川の背後で三人のやり取りを見守っていた三十代の男が「あいよ！」と威勢のいい返事をして、悠太たちを廊下の奥にある客間に案内した。

板張りの小体な部屋の中央にはテーブルが置かれ、大きく穿たれた窓からは峻厳な山々や清谷郷の集落が見える。雲一つない空にはトンビが二羽、ゆっくりと弧を描いて舞っている。

いったん引っ込んだ二瓶が先付けと飲み物を持ってまた現れた。

「山ぶどうのジュースか？　こいつは嬉しいな」

榎が相好を崩して一口飲み、悠太と次川にも勧めた。

言われるままにグラスを傾けた悠太は思わず目を見開いた。甘すぎず、しかし薄味すぎて物足りないわけでもなく、かすかな酸味と滋味が舌を喜ばせる。これを伊予南フェアに出したら、訪れる客にきっと喜んでもらえるのではないだろうか。

「それよりも榎社長、さっきの話だけれど、ご説明いただけますかね？　なぜこの……石田くんと言ったっけ？」

「石打です」

「……がここにいるんですか？　それから榎社長は大事な話があると言って私をここに呼び出しましたが、どんな話ですか？　この石田くん……」

「石打です」

「……の前でお話になるつもりですか？」

榎はブドウジュースを飲み干し苦笑した。

「次川くん、君は思っていた以上にせっかちな男だな。だいたいにおいて、こういう食事の席では初めは世間話でもして、本題はメインの料理が来るころにするものだがね。もちろん話はこの石打くんの前でするつもりだ。そのために石打くんも呼んだんだよ。それよりもブドウジュース、飲んでみないか？　実に美味しいぞ」

次川はグラスに手を伸ばさない。

「まあ、良かろう。君が早く本題に入ってほしいと言うのならそうしよう」

榎は真顔になった。

「それなら次川くんにまず聞くが、君は伊予南市役所の地域振興課にいた亀田太という男に再三会っているらしいな？　彼に何を言ったんだ？『伊予南市のまちおこしを妨害しろ』とでも唆したのか？」

「いきなり直球を投げてきましたね」

今度は次川が苦笑した。

「今日は私を糾弾するために呼び出したんですか？　そもそもその話を誰から聞いたんですか？」

「部下と探偵に君の動向を見張らせていると言ったはずだ。君の伊予南市での行動は我々には筒抜けだったんだよ。それから君の生い立ちについても追加でいろいろ調べさせてもらった。君の父親のことで新たに情報を得させてもらったよ」

「そうですか。それはご苦労なことですね」

次川は身構えるような顔をしてグラスを手に取り、ブドウジュースを舐めた。

「君の父親は伊予南セラミックスという町工場を経営していて、追い出されるようにして伊予南市を出ていった。電子部品向け

大正大学地域構想研究所ホームページ（http://chikouken.jp/chiikijin）では、連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

の高機能セラミックスを作ろうとしていたが、地元の金融機関から追加の融資を受けられなかったばかりか、『うるさい』『臭い』などと周りの住民たちから立ち退きを迫られてね。伊予南セラミックスはその二年後に倒産し、父親は失意のうちに亡くなった。ここまではすでに調べがついていたことで、以前、君にもそう言ったはずだ。今回、新たに分かったのは君の父親の死因だ。自動車事故だったそうだね」

「よくお調べですね」

「君は父親が掛けていた保険金を受け取り、その金で大学に進学し、さらにアメリカに留学してMBAを取得した。保険金という父親がくれた最期のギフトが君の人生を苦境から救ったわけだな」

「そう言えるかもしれませんね」

次川はブドウジュースを飲み干した。

「父親が遺したギフトのおかげで今のポジションを獲得した君は、しかし、今、伊予南市のまちおこしを妨害することに、すなわち伊予南市への復讐に血道を上げている。君の父親はそれを悲しんでいるんじゃないかね？」

「どうしてそう思うんですか？」

次川は怪訝な顔をした。

「君の父親は自動車事故で亡くなったそうだが、もしかしたら自殺だったんじゃないかと思ってね」

次川は言葉を失ったような顔をして榎をにらみつけた。

二瓶が昼食の膳を運んできた。どうやら一の膳らしい。さまざまな山菜の煮物や漬物を載せた小皿がそれぞれの膳に十枚近く並んでいる。

悠太は食欲を刺激され唾を呑み込んだが、今は箸をつけるべきではないような気がして、榎と次川のやりとりを見守った。

「悪いがこれも探偵に調べてもらったんだよ。なかなか腕のいい探偵でね。君の父親が事故で亡くなった時の状況を当時の関係者に熱心に聞いて回ってくれた。関係者の証言によれば君の父親は山道のカーブを曲がり切れず、ガードレールを突き破ってがけ下に転落してしまったそうだが、『どうにも腑に落ちない』と複数の人間が探偵に証言してくれたんだよ。彼らによると君の父親は自動車マニアで、工場の経営がうまく回っていたころにはフェラーリやポルシェなどを所有していたらしいね。それだけじゃない。君の父親について『学生時代には自動車部に所属して、運転技術はなかなかのものだったと教えてくれた人もいた』と探偵は話していたよ」

「榎さんは私に何を言いたいんですか？」

次川がうんざりしたような表情をして見せた。

「君の父親の運転技術を持ってすれば、山道のカーブを曲がり切れず、ガードレールを突き破ってがけ下に転落してしまうことなんてあり得ない、そう証言する人たちが複数いたという話だ」

「そうじゃありません！　私の質問の意図はそういうことじゃない。仮に私の父が自殺だったとして、だから何だと言いたいのですか？」

「ふむ……」

榎は感心したような顔をして口の端に笑みを浮かべた。

「私が君をそれなりに評価しているのは、どうやら見当違いではなかったようだな。君は思っていた以上に頭がいい。つまらない問題に拘泥しない姿勢は経営者には欠くべからざる資質だ」

榎が笑みを引っ込める。

「君は私が以前、『君の父親の口惜しい気持ちがよく分かる』と言ったのを覚えているかね」

「確かにそう言われましたね」

「私はさらにこう続けた。『君の父親は伊予南市の金融機関や住人への恨みやつらみを君に話して聞かせたはずだ。積極的に話さなくても親の口惜しい思いは子供に伝わるものだ』と。私自身、創業してしばらくの間は地元の金融機関から相手にされず、周囲の住民たちからも疎んじられた。その口惜しさをいまだに忘れられないこともあって、君の父親の気持ちを私なりに忖度、斟酌してしまったんだが、その解釈は間違いだったと今、痛感しているんだよ」

榎はブドウジュースを飲み干し、ふうと小さくため息をついた。

「君の父親は君を受取人として自分に保険をかけていた。そして自殺の可能性を否定できない……私も人の親だからね。君の父親の真意は、伊予南市に意趣返ししてほしいとか、恨みを晴らしてほしいとか、そんなところにあるはずはないと今では確信しているよ。君の父親は君にまっとうな人生を歩んでほしいと望み、君に未来を託したんだ。だから最期のギフトを贈ったんだ」

「なぜそう思うんですか？」

「親心とはそういうものだからだ」

次川は榎を見つめた。

「それを言いたくて私をここに呼んだのですか？」

「〝それも〟言いたかったことの一つだ。本題はまだ別にある。どうする？　このまま続けるかね？　それともひと休みして食事を楽しむかね？」

「続けてください。ただしその前に、石打くんがなぜここにいるのか説明してもらいたいですね。このまちおこし特命社員だとかいう、あまりぱっとしない男が我々の会話に参加する意味が私にはまったく理解できないんです」

「初対面の人間に『あまりぱっとしない』とまで言うかね」

榎が苦笑した。

「私はこの石打くんをなかなか見どころがあるかもしれないと思っているんだよ」

「どこがですか？」

次川は興味なさげに悠太を一瞥した。

「まずこの男は正直だ。隠し事ができない人間なんだ。しかもモノの考え方や受け止め方がいちいちまっとうだ。衒いも見栄もなく、才気走った人間に特有の危なっかしい驕りもない。こういう男はどこにでもいそうでいて、実は決してそんじょそこらにいるものではない」

「私には凡庸な男にしか見えませんがね」

「凡庸さをなめない方がいい」

榎の目つきが真剣さを帯びた。

「なぜなら我々のような起業家や実業家の生死を決めるのは、結局のところ、凡庸と言っても差し支えない、ごく普通の人々のごく普通の願いや欲望だからだ。長い間、ビジネスの世界にどっぷりと浸かってきた私は今、その身も蓋もない事実が骨身に沁みているよ。この世界で生き残れるのは才能に恵まれた人間でも、目から鼻へ抜けるような賢い人間でもない。人々の凡庸な願いや欲望を理解でき、一方で欲も得もなく仕事に没入できる、つまり馬鹿者になれる人間だけだ」

「この男がそういう人間だとでも？」

次川は悠太を指さした。

榎が悠太を見た。

「石打くん、君はこの次川くんの発言を聞いてどう思った？　遠慮せずに吐き出してみないか？」

「あ……いや……」

「君は次川くんから散々なことを言われているんだ。臆することはないぞ」

「でも……」

躊躇する悠太を見て、次川が見下したような笑みをかすかに浮かべた。

悠太の脳裏に今朝、新庄が電話で言った内容が蘇った。

――亀田が今朝、出社するなり私たちに土下座して懺悔したんですよ。実はヴィンセント・ファンドの次川副社長には何度も会っていて、次川から『まちおこしを滅茶苦茶にしてみたらどうですか』とそそのかされていたとね。懺悔、告白してくれたのはけっこうなことなんですが、私はどうも腑に落ちませんでね――。

悠太は頬を強張らせ、次川を正面から見

だ。過剰な思いは時に周囲を傷つけ、自らをも損なってしまうが、その一方で良き事でも悪しき事でも、何事かを成し遂げる原動力にもなり得る。君の存在はリスクであると同時に、今の二名島バッテリーを変える発火点にもなり得る。今の二名島バッテリーの幹部社員に絶対的に足りないのは君のようなタイプの人間なんだよ」

「報酬はどうされるつもりですか？　私はヴィンセント・ファンドでそれなりの……というかかなりの収入を得ていますよ」

榎は先刻承知だとばかりにうなずいた。

「まずヴィンセント・ファンドで君がもらっている収入は最低限、保証するよ。そして君が私の期待値を超えてくれれば、その超えてくれた分だけ報酬を上積みしていこう。いずれにしても悪いようにはしない」

次川は榎を見つめ、うなずいた。

「なるほど、榎社長のお考えはよく分かりました」

「多少は前向きに考えてくれる気になったかね」

「いえ……」

次川はかぶりを振った。

「せっかくの申し出は光栄ですが、お断りします」

「その心は？」

「榎社長はすでに理由をお見通しでしょう？」

「復讐か……」

表情を変えない次川を見て、榎は小さく息をついた。

「君がどう答えるか予想はついていたよ。君がそう易々とは今の自由な立場を捨てるはずがないからね。実際、君が二名島バッテリーに入社して私の下で働きだしたら、復讐にうつつを抜かしているわけにはいかなくなる」

「それならなぜ私を誘ったのですか」

「可能性が三割あれば試してみるのが私のやり方だ」

「三割？　なぜ三割も可能性があると……」

「その話はもういい。最後にもう一つ、聞きたいことがある」

榎の目つきが鋭くなった。

「君は以前、私の孫娘の薫子と会っているね。薫子の大学近くの喫茶店で君が彼女に接触したと探偵が教えてくれた。何を話したんだ？」

薫子と聞いて悠太の胸がざわついた。この男が薫子さんと会っていただって？

「申し訳ありませんが、それについては言えませんね」

「まちおこしについての情報を収集しようとしたのかね」

次川は榎から目を逸らした。

「ご想像にお任せします。ただ誓って言いますが、お孫さんを唆したり、かどわかしたりはしていませんのでご安心ください」

「そんなこと、当たり前じゃないですか！」

気がついた時にはもう悠太は声を発していた。

「彼女があなたに唆されたり、かどわかされたりするはずはないけれど、彼女にはもう二度と近づかないでください！　もしまた近づこうとしたら僕は許しません！」

「許さないって、どうするつもりかな？」

次川が悠太をにらみ返した。

「そ……それは……とにかく……とにかく僕はまちおこしを絶対に成功させてやります。あなたの好きにはさせません！」

「せいぜい頑張ってみたらいいよ」

次川は不敵な笑みを浮かべた。

食事を終え、榎を助手席に乗せて深山の里まで戻って来た悠太は、自分の部屋に入るなりソファに倒れ込んだ。

さんざんな昼食会だった。榎の話が終わった後は三人ともほとんど言葉を交わさず、黙々と食事を口に運んだ。二瓶と呼ばれていた料理長のつくる昼餉はきっと美味しいはずなのに、悠太は刺々しい空気に気圧されて味が分からず、まるで粘土を食べているみたいだった。

しかも伊予南市のまちおこしの前途はまさに多難だ。

ケータイが鳴った。喜多嶋からだった。出る気になれず放っておいたが、呼出音は延々と鳴り続ける。悠太は根負けして通話ボタンを押した。

「電話にはとっとと出ろよ！」

喜多嶋が怒鳴った。

「四分地社長からの指示だ。こっちでの伊予南フェアの準備は今週一杯で終了、来週は全員が東京入りだ。いいか？　いよいよだぞ」

Kazuhiro Shibuya
作家・経済ジャーナリスト・
大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜市生まれ。
日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、
『日経ビジネス』発行人などを務めた後、
2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー
『錆色（さびいろ）の警鐘』（中央公論社）で作家デビュー。
TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。